

## 知育とゆとり教育を考える —学習指導要領の変遷とともに—

開催日 平成 18 年 12 月 2 日

講師 本学講師 光 成 研一郎

学習指導要領とは、全国どこで教育を受けても一定水準の教育を受けられるように、文部科学省によって告示された教育課程の基準のことである。その学習要領は、社会の発展と児童生徒の発達等に即し、およそ10年ごとに改訂が行われてきた。その改訂のポイントを教科中心主義教育と経験主義教育の立場から捉えるとともに、2000年度と2003年度に実施された、OECDによる国際学習到達度調査、略称PISA（The Programme for International Student Assessment）において判明した日本の学力低下の問題についても考えた。

PISAによる2000年度調査に続き、2003年度調査においても、読解力（前回1位→1位）、数学的リテラシー（前回4位→2位）、科学的リテラシー（前回3位→1位）と、総合して学力世界一を達成したフィンランドの教育の特徴として、まず学力格差の少なさがあげられる。注目すべき点は、成績優秀者の割合が特別高いのではなく、成績不良者の割合が極端に低い点である。読解力における習熟度レベル別の生徒の割合表（6段階、レベル1～5とレベル1未満に分類されている）を見てみると、レベル1未満の数値がフィンランドは1.1%である。一方、日本はOECD平均6.7%を上回る7.4%もレベル1未満の生徒が存在するのである。当然の事ながら、フィンランドにも低学力の生徒は存在する。しかしながら補習制度を確立し、義務教育を希望すれば1年延長することができるシステムをとるなどの取り組みが、学力の底上げにつながっていると考えられる。また学校間、地域間の学力格差も少ない。このことは貧富の格差が少ないフィンランドの社会状況とも無縁ではない。さらにフィンランドの教育の特徴として、教師の質の高さをあげることができる。教師の社会的地位が高く、初等・中等教育の教員は修士号取得者である。また、実習に重きを置いた教師教育カリキュラムが整備されている。

確かに日本のゆとり教育の影響で、多かれ少なかれ学力低下、学力格差が生じたことは事実であろう。しかしながら従来の知識の詰め込み教育に戻ることは、決して正しい選択とはいえない。なぜなら学力世界一を達成したフィンランドでは、ゆとり教育が現在もなお推進されているからである。日本はかつてないこの少子化時代を逆に好機と考え、すべての児童、生徒に向き合ったきめ細やかな学習指導を徹底するとともに、人間性が豊かで、コミュニケーション能力や問題解決能力に長けた教師育成をはかることが重要である。さらには、ゆとり教育の意味を今一度検討し、知識の詰め込みでは養うことができない国際化・情報化・生涯学習社会に対応できる人間の育成、すなわち知識を運用、活用できる人間の育成を経験教育を通じて、はぐくんでいかなければならないと考える。